

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「究極のローカル花開くか スーパーが屋上菜園」
- 2) 「銀行の行商 移動店舗車、ATMや有人窓口も」
- 3) 「大和ハウス、女性の家事負担軽い住宅」
- 4) 「宇宙飛び交う反粒子発見か 暗黒物質由来の可能性」

1) 「究極のローカル花開くか スーパーが屋上菜園」

米ホールフーズがニューヨークのブルックリンの店舗で屋上菜園を始めたのは2013年末のことだった。屋上菜園に特化したゴッサム・グリーン社が運営。面積は1860平方メートルで、年200トンの青果を生産する。作った青果の多くは収穫から数時間以内にパック加工して、主に階下の売場で販売するが、一部はニューヨーク周辺の他の店舗へも供給している。屋上菜園で収穫される野菜を自店で販売するスーパーマーケットは世界で最初というふれ込みだったのだが、調べると今も唯一の存在のようだ。

米食品販売業界ではここ数年、ローカル（日本の地産地消にあたる）がブームで、青果売場に単に並べるだけではなく、ローカル専用の売り場を設けている。その日のローカル仕入れのアイテム数を大きく表示するなど、強くアピールするスーパーマーケット企業が急増している。

もともとはニッチな取り組みだったが、すでに「ローカル」という大きなカテゴリーが存在するとまで指摘する人もいる。背景には消費者意識の変化がある。生産者の顔が見えるものを買って、産地を応援したいといった人が増えているわけだ。

産地から店舗まで一気通貫で低温管理して青果を運ぶシステムをコールドチェーンと呼ぶ。米国は製配販を通してこれが完成しており、例えば西海岸で採れたものを東海岸で売るといったことはもはや当たり前の時代だ。

しかし、長いサプライチェーンで大量に排出される二酸化炭素を考えるとエコではないという批判が表面化。逆にサプライチェーンを短くする動きが出ていて、これが消費者のローカル志向とつながったと私は思っている。

屋上菜園はサプライチェーンが最も短い究極のローカルで、目指すべきモデルの一つとも言えるのだが、普及への道のりは長そうだ。ゴッサム・グリーン社は現在4カ所で生産しているが、成長はスローで、投資コストとノウハウの積み上げというハードルがあるのだろうと思っている。

一方、スーパー以外の企業でこの領域への参入を10月に発表したのがディスカウントストアチェーンのターゲットである。デザイン企業のIDEO、大学のMITの3者が食に関する最新の取り組みを実験する組織を結成。すでにいくつかの店頭で実証実験を開始している。

そして、来年早々にスタートさせるのが垂直農法による店内水耕栽培だ。コンピューターによって精密にプログラミングされた環境で、縦に長いタワーのような設備を使って栽培する。当初は葉物が中心だが、ゆくゆくはポテトなどの根菜にもトライするとしている。成功した暁には多くの店舗への水平展開も視野に入れる。

こういった究極のローカルを英語ではウルトラローカルと表現する。試行錯誤は始まったばかりなのだが、最大手が参入したことで大きな可能性が開けたようだ。その店で数時間前に採れた野菜を買って食べる、そんな時代が来るのかもしれない。

日本でも「地産地消」や「とれたて野菜」というともはやブランドのようにカテゴリー化されているが、短くともサプライチェーンはある状態だ。ローカル志向が欧米よりも低いこともあり「たった今店内でとれたばかりの野菜」よりも「有名な産地のおいしい野菜」のほうが売れる気もする。日本でウルトラローカルを普及させるにはどのような形が最適か、今後の課題になりそうだ。

2) 「銀行の行商 移動店舗車、ATMや有人窓口も」

大垣共立銀行（本店・岐阜県大垣市）は、8日から愛知県の東三河地方で移動店舗車「OKBスーパーフロンティア号」の運行を始めた。

同行は東三河地方では同県豊橋市内に2店舗を置いているが、店舗のない豊川、新城、田原市の商業施設などを移動店舗車で巡回し、顧客の利便性を高めるとともにネットワークを広げるのが狙いだ。

車は全長約8.5メートル。ATMや有人窓口を搭載した。窓口では、預金口座開設や公共料金の支払い、ローンの申し込みなどが行える。同行の移動店舗車は、飛騨地方を回る「OKBスーパーひだ1号」や被災地を支援する「OKBレスキュー号」に次いで、3台目。

豊橋市の藤沢支店で行われた出陣式で、土屋嶋たかし頭取は「これからは銀行が自分のところにやってくる。銀行に対するイメージが変わるだろう」と話した。

毎週3日間巡回し、月曜日にピアゴ新城店（新城市）、木曜日にDCMカーマ渥美店（田原市）、金曜日に同豊川東店（豊川市）で正午から午後6時まで営業する。このほか、観光地やイベント会場などでも出張営業する予定だ。

巡回先である商業施設内にもATMはあると思うが、手数料がもったいないということもあり週3日回ってきてくれるのであればそのタイミングで行く方が良いだろう。窓口業務を行ってくれる点も有難いと思う。近頃は買い物難民を救うために移動スーパーの普及が進んでいるが、その買い物をするためにはお金が欠かせない。そういう人たちのためにも移動スーパーにATM設備を備える、もしくは銀行が過疎の住宅地を回るといったサービスもあると便利だと思う。その他、食以外にも必要とされるサービスはまだまだたくさんあるだろう。

3) 「大和ハウス、女性の家事負担軽い住宅」

大和ハウス工業は2017年1月中旬、女性の家事負担を軽くする戸建て住宅を発売する。玄関に家族それぞれのロッカーを設け、着替えて居間でくつろぐまでの動線を設計。できるだけ自分のことを自分で済ますよう促し、家事を家族で共有する。共働き世帯を主な対象に全国で年間220棟の受注をめざす。

新しい住宅のコンセプトは「家事をシェア（共有）する」。玄関から片付けロッカー、洗面所、キッチン、居間といった帰宅後のルートを設定し「身の回りの物を散らかりにくくする」（大和ハウス）仕組みだ。来客向けには居間から玄関まで別の動線を設定する。

会社によると、家事の約8割が片付けや汚れ物の洗浄など「マイナス状態をゼロに戻す作業」という。家事シェアハウスは女性社員を中心とする10人程度のグループが企画。中部地域や北陸地方で試験導入をしたところ好評だったため、全国展開を決めた。

少子化の進行により、住宅市場の先細り感は顕著になっている。同社住宅事業担当の大友浩嗣・取締役常務は「住み方にマッチする住宅を提案していくことが今後の1つの競争軸となる」と話している。

女性・母親が働くことが当たり前になった今、それをサポートするサービスが充実してきている。家事=母親がするものという考えは古いものになり、「自分のことは自分でする」のが定着しそうだ。少し寂しい気もするが、その次代にあった提案はおもしろいと感じた。

4) 「宇宙飛び交う反粒子発見か 暗黒物質由来の可能性」

欧州合同原子核研究所は8日、国際宇宙ステーションの観測装置で、物質と出会うと消えてしまう反物質でできた「反ヘリウム」とみられる粒子が宇宙を飛び交っているを検出したと発表した。

これまで自然界で発見された例はなく、本物と確認されれば、宇宙を満たすとされるが正体不明の「暗黒物質」の存在確認につながる可能性がある。

検出したのはヘリウムと重さがほぼ同じで、帯びている電気のプラスとマイナスがヘリウムとは逆の粒子。ISSの装置で2011年からの5年間に観測した900億個超の粒子を分析したところ、ヘリウム原子核が37億個あったのに対し、反ヘリウムとみられる粒子が数個見つかった。

反ヘリウムは反陽子2個と反中性子1個で構成。暗黒物質同士が衝突すると反陽子などを生み出すとされ、それを材料に反ヘリウムができた可能性が考えられている。

ただ、観測は難しく、データを蓄積しさらに詳細な解析が必要という。研究チームの灰野禎一・台湾中央研究院副研究員は「データの検証はまだ十分とは言えない。今後も慎重な確認作業が必要だ」としている。

まだ宇宙空間に存在するもので地球上で存在できる物質なのか分からないが、単純に今の物質性質だけで考えるとゴミ問題など解決することができるのではないかと思った。現段階では大きな話なので現実的ではないが、様々なことに展開できそうな将来性を感じさせる魔法のようなニュースだ。